新潟大学国際センター紀要　第４号　31 - 37，2008年　Journal of the International Exchange Support Center
2008, Vol. 4: 31 - 37, Niigata University

日本語の音声指導事例紹介 －その１－
―ベトナム語母語話者の場合―
A Class Report #1
Japanese Language Pronunciation, Rhythm and Intonation Training
A Case Study of a Vietnamese Language Speaker

池田　英喜*
（ikeda@isc.niigata-u.ac.jp）

キーワード：特殊拍、拍感覚、イントネーション、発音

The Vietnamese language is known as one of the Tone languages. Therefore, its native speakers often find it difficult to learn the Japanese language especially in acquiring its rhythm and intonation. In this report, I will introduce a Vietnamese student whose Japanese pronunciation and intonation have dramatically improved through only rhythm training.

1.　はじめに

ベトナム語は音の高低(1)を意味の区別に用いる、いわゆるトーン言語の一つであり、この母語話者にとっては、一般にアクセントやイントネーションといった別のパターンの音のトーンを習得することが困難であると言われる。本稿では、敢えてトーンの習得には目をつぶって、日本語の拍感覚習得のトレーニングに集中させたところ、結果的に大きくトーンが修正された学生の事例を紹介する。

2.　指導詳細

2. 1.　被験者とその日本語の音声的問題点

この事例の被験者は、20代前半ベトナム人女性で、日本語能力試験２級合格相当の日本語力を持った学生である。また、被験者のコース開始時における日本語の音声的特徴は以下のとおりである。

1. 長音が伸びないことが多い
2. 促音があったりなかったりする
3. 撥音があったりなかったりする
4. 個々の単語のアクセント型の習得がなされていない

* 国際センター　准教授

5. 基本的なイントネーション型(2)が習得されていない

6. 文と文を続けて読んでしまう

１－３の特徴については日本語の拍感覚の欠如、４－５については日本語のトーンの未修得と言い換えることが出来よう。

今、この学生が抱える日本語の音に関する２つの特徴的な問題を考慮した場合、早い段階で修正すべきはどちらか、また15週間という限られた時間の中で、トレーニングの効果がより大きいと考えられるのはどちらであろうか。

そこでまず、この学生の発話を聞くのは日本語母語話者であると仮定して、どちらにより違和感を覚えるかを想像してみた。すると、拍感覚には方言差があまり認められないこと、アクセント型には日本語母語話者間でも通常かなり差がある(3)こと、歌を歌うときなどは、語固有のアクセントや文のイントネーションが無視される場合が普通であることなどから、まず拍感覚を養うトレーニングを優先するべきだと考えた。

一方で、この学生の母語がトーン言語なので、トーンの修正には時間がかかり、そのことを気にしすぎると、学生の発話自体が消極的になってしまう（もちろん個人の性格にもよるが）ことも考慮した。

その結果、当然のことながら、アクセント・イントネーションといったトーンの問題にはしばらく目をつぶることとなった。

3. 使用機器

サンプル音源を聞かせるために、ＭＰ３プレーヤー（CREATIVE、MuVo-S200）を使用した。また被験者の声の録音の際には、ICレコーダー（SONY、ICD-BP220）と外付けのマイクロフォン（SONY、ECM-Z157）を使用した。なお、レコーダーのマイク感度は口述モード、録音モードは標準を使用した。MP３プレーヤーを使用したのは、E-mailを用いて、授業時以外に学生と音声ファイルのやり取りをするためである。

4. 指導手順

実際の指導手順は以下のとおり。

（１）モデルリーディングの音源を聞かせる。
＝＞（２）読み原稿を渡す。
＝＞（３）原稿を音読させて、ICレコーダーで録音する。
＝＞（４）被験者と一緒にモニターし、モデル音源との違いを挙げさせる。
＝＞（５）（１）に戻る。

上記（１）－（５）のサイクルを繰り返す。今回は１期15回の授業で、７サイクル実施することができた。

5. 具体的指導方法

被験者の学生の拍感覚で特に問題となるのは、長音、促音、撥音、の３点である。そこで、長音、促音、撥音は通常１泊のところ２拍分に伸ばすことを徹底する。しかしながら、もともと伸ばす癖・習慣がない者が２拍分に伸ばそうとしてもなかなか伸びない。本人は２拍分程度伸ばしたつもりでも、実際には１拍分程度に伸びるだけなので、結果的に日本語母語話者が用いる拍の長さとほぼ同じになるという傾向がある(4)。

実は、これらの音は少しくらい伸ばしすぎても、日本語母語話者の耳には違和感と感じられにくい。それどころか母語話者同士でも、相手にわかりやすく発話しようとすると少し伸ばし気味に発音することがある。子供に新しい言葉を覚えさせようとするときなどがその顕著な例である。例えば「天王寺」「東京に出張します」「授業に遅れないようにしましょう」というフレーズをわかりやすく発話しようとすると、以下のようになる。下線は通常の１拍よりもやや伸ばして発音することを表す

てんのうじ
とうきょうにしゅっちょうします。
じゅぎょうにおくれないようにしましょう。

ただ、トーンに関しても一番気になる１点だけ修正を要求した。実は被験者の学生は文を続けて読む癖があり、しかも平叙文の文末であっても音が下がらない傾向が見られた。そこで、１文が終わったら、つまり読点の前では、必ず音を下げ、次の文の発話開始まで２拍分待つように指示した。

6. 実践報告

6. 1. 第１回（2006年10月13日）

実際の授業は2006年10月６日に始まったのだが、その際は授業のガイダンスとして、進め方の説明をし、次週に実際に練習する題材(5)を紹介した。

なお、本稿では１拍分の長音は他の音に続ける形で「あ、い、う、え、お」で、１拍に満たない長音は同様に「ぁ、ぃ、ぅ、ぇ、ぉ」で表すことにする。また、拍を明確にするために、母音・促音・撥音だけを抜き出したものをアルファベット書きにして示す。その際母音はa, i, u, e, o、促音は＊、撥音はNで示し、１拍分に満たない母音はⓐのように、丸で囲んで示す。

> 統計というと、味も素っ気もない数字を思い浮かべる人が少なくないようですが、実は、中には、心が和むような、ほのぼのとした統計もあるのです。気象庁が行なっている、生物季節観測の結果をまとめた統計がそれです。この観測の目的は、生物と気象の関係を調査することによって、総合的な気象の動きを把握することです。
>
> （土岐他1995：第４課）

この学生の音の特徴を抜き出すと以下のようになる。

「思い浮かべる」が「おもぅうかべる」に　（ooiuaeu>oo⓾uaeu）
「和む」が「なごぉむ」に　（aou>ao⓪u）
「目的」が「もくてえき」に　（ouei>oueei）

6. 2.　第 2 回（2006年10月20日）

第 2 回の題材の文章は、前回の続きで、以下のとおり。

> また、この観測結果を元に発表される梅の開花予想、桜前線などの言葉は、私達に新しい季節の訪れを告げると共に、現代生活では忘れられがちな、四季の移り変わりを思い出させてくれます。そしてこれらの統計を見ると、長い日本列島を、南から北へ、北から南へ、季節がゆっくりと移っていく様子がわかります。例えば、平年の梅の開花日ひとつとっても、鹿児島で一月二十六日、札幌で五月六日、三ヶ月以上ものずれがあるのです。
>
> （土岐他1995：第 4 課）

第 2 回の特徴的な音は以下のとおり。

「観測結果」が「かあんそうくけかあ」に　（aNoue*a>aaNooueaa）
「開花日」が「かぃかぁび」に　（aiai>aⓘaⓐi）
「五月六日」が「ごおがあつうむぃか」　（oauuia >ooaauuuⓘa）

6. 3.　第 4 回（2006年11月10日）

第 4 回の題材は過去 3 回とは内容が変わり、以下のとおり。

> 日本人は昔から鯨と親しんできた。また、鯨は食べ物として貴重な蛋白源だった。だから、鯨を食べることは、日本人の文化であり、これを守るべきだという意見が日本にはある。一方、イギリス人やアメリカ人なども鯨の油を得るために、18世紀から鯨を捕っていたが、鯨を食べる習慣はない。そのため彼らは「日本人は知能の発達した動物を食べる民族」と非難している。
>
> （土岐他1995：第 8 課）

音声特徴は以下のとおり。

「貴重な」が「きぃちょぅな」に　（iooa>iⓘo⓪a）
「日本人の」が「におんじぃの」に　（ioNiNo>ioNiⓘo）
「非難」が「ひいなん」に　（iaN>iiaN）

6. 4.　第 5 回（2006年11月17日）

第 5 回の題材は第 4 回の続きで以下のとおり。

> 捕鯨に反対する人たちは、鯨は哺乳類だから、魚類と分けて考えるべきだと主張する。

一度に一頭か二頭しか子供を産まない哺乳類を、一度に何千、何万という卵を産む魚類と一緒にはできないというのだ。また、この考え方の裏には、鯨は神が作った神聖な生き物であるといった宗教上の理由もあるようだ。

（土岐他1995：第８課）

音声特徴は以下のとおり。

「哺乳類」が「ほおにゅうるい」に　（ouuui>oouuui）
「魚類」が「ぎょおるい」に　（oui>ooui）
「主張」が「しゅうちょお/しゅっちょお」に　（uoo>uuoo/u*oo）
「考え」が「かんげ/かんがぇ」に　（aNae>aNe/aNaⓔ）
「一頭か二頭」「いっとぉかにとぉ」に　（i*ooaioo>i*oⓞaioⓞ）
「一緒に」が「いっしょおに」に　（i*oi>i*ooi）

6. 5. 第６回（2006年12月８日）

これに対して、捕鯨を進めようとする人たちは、生物資源は、基本的に魚も鯨も同じで、利用できるものは利用すべきだという。そしてIWCの決定は、「科学的ではない」「ある特定の種だけを神聖な生物だとするのはおかしい」と反対している。このように、捕鯨の問題は、さまざまな国民の感情や国際問題が絡んでおり、どの国の意見が正しいとは、簡単には言えない。

（土岐他1995：第８課）

音声特徴は以下のとおり

「人たちは」が「ひっとたっちは」に　（ioaia>i*oa*ia）

6. 6. 第７回（2006年12月15日）

第７回は事前に題材を提供することなく、授業の中で紹介し、しばらく練習時間を与えて録音した。

サルが覗き穴から前を見ると、テレビのスクリーンが４台並んでいます。４台のうちの１台には、縞が示されていて、それ以外の３つのスクリーンには、すべて同じ灰色のパターンが示されています。サルの手元には４つのキーがあり、それぞれのスクリーンに対応しています。４つのうちどのスクリーンに縞が出ているかということを、キーを押すことによって反応させる、というように訓練するのです。

（土岐他1995：第９課）

音声特徴は以下のとおり

「示されて」が「しめえされて」に　（ieaee>ieeaee）
「手元」が「とめて」に　（eoo>oee）

6. 7.　第８回テスト（2007年１月26日）

『観測史上初、新潟市１月積雪なし』(6)

暖冬の影響で、新潟市の１月の積雪が観測記録上初の「なし」だったことが１日、分かった。新潟地方気象台によると、１月の平均気温は4.9度で平年に比べて2.3度高かった。同気象台は「積雪なしは、観測の記録が確認できる1891年以来初めて」としている。同気象台によると、佐渡市でも１月の積雪は１センチ未満で、記録がある1912年以降、最少。上越市でも、12センチと少なかったという。同気象台は、冬型の気圧配置の日が少なく寒気が南下しなかったことや、エルニーニョ現象の影響で南から温かい空気が入りやすかったことが原因とみている。

音声特徴は以下のとおり

「観測史上初」が「かんそぉくしじょぉはぁつ」に　（aNouiooau>aNoⓞuioⓞaⓐu）
「積雪なし」が「せきせつなぁし」に　（eieuai>eieuaⓐi）
「上越市でも」が「じょおえつぅしぃでぇも」に　（ooeuieo>ooeuⓤiⓘeⓔo）

7.　終わりに

音声指導と名打っておきながら、実際にはこの学生には拍感覚だけを磨くトレーニングを実施し、発音･アクセント･イントネーション矯正はほとんど行なわなかった。結果的には発音・アクセント・イントネーションも、拍感覚同様に見違える（聞き違える？）ほど上達した。ひょっとすると、拍感覚を磨くことこそが日本語音全体に対する感覚を鋭くすることへの大きなきっかけとなり、全体としての日本語の発話が上達するのかもしれない。

他の言語話者のデータも検証して、同じような結論が得られるかどうかを次稿では検討したい。

（本稿は新潟大学平成18年度授業改善プロジェクト経費を受けて実施した授業のデータを下に作成したものである。）

引用文献

土岐哲他（1995）『CD日本語中級J301―基礎から中級へ―』スリーエーネットワーク

＜注＞

（1） 音調とも言う。

（２） 平叙文では文末の音が下がり、疑問文では文末の音が上がる。
（３） 京阪式アクセント、Ｉ型アクセント、標準アクセント等。
（４） 例えば野球の選手がバッティングフォームを修正するために、自分の感覚では大きく変えたつもりでバットを振ってみても、それをビデオで撮影して実際に見てみると、大して差が現れないことと似ている。
（５） 題材は土岐哲他『CD日本語中級J301―基礎から中級へ―』スリーエーネットワークより。
（６） インターネットから取った新聞記事（出展不明）